

2025_0403「春先まで枝に残るカラマツの球果（写真）」日々の理科 3892号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

カラマツ（落葉松）は字の通り、「落葉する針葉樹」です。日本国内で普通に見られる「落葉針葉樹」は「カラマツ」の他には「メタセコイア（アケボノスギ）」ぐらいしか思いつきません。

カラマツが晩秋にすべての葉を落とす理由は、雪の重さから枝を守るためです。モミヤトウヒは冬でも葉を残しますが、枝が強靱かつしなやかで、雪の重さを受け止めて、枝を下にしなさせます。枝が折れることはめったにありません。カラマツの材も強靱ですが、しなやかさはなく、森の中でも相当に太い枝が落下しているのをよく見かけます。当然雪の重さにも弱く、葉を残すことは致命傷になります。カラマツに限らず、落葉樹は初雪の前に葉を落とせるかどうかは、死活問題になるのです。

不思議なことに、カラマツは冬でも実を落としません。カラマツの実は、松ぼっくりを小さくしたような「球果」と呼ばれるものですが、晩秋から真冬、そして春先になっても、その多くが枝に残っています。前の年の球果を残したまま、新しい葉が芽生えるのが普通です。理由はよくわかりませんが、自然の形や営みには「例外なく理由がある」ので、カラマツも球果を落とさないことに明確な理由があるのでしょうか。

以下は私の推測です。カラマツの球果そのものに栄養はなさそうですが、その隙間に残った種子（翼果）には栄養があります。真冬の食物が乏しい時期には、野鳥や小動物の栄養源になっているはずですが、秋に球果を落としてしまうと、そのまま雪に埋もれてしまいます。それよりもあえて枝に残して、野鳥や小動物についばんでもらい、残った種子を1つでも多く拡散してもらおう・・・ということではないでしょうか？

（2025年4月上旬／北軽井沢／遠隔観測）

